新山協ニュース

発行者　平田大六　発行所　新潟県山岳協会
〒951　新潟市下旭町109　鈴木敏雄方　TEL025−222−9548

専門委員会・理事会報告

会務担当　遠藤家之進正和

平成7年度最後の専門委員会・理事会が3月17日長岡けさじろ荘において開催された。

各委員会のける今年度の事業活動、予算関係の報告、平成8年度のアクションプランの説明と質疑応答となると時間が足らず昼食をはさんでの会議となった。これも協会活動の充実ぶりを表すものである。

平成7年度の活動のなかで冬山研修会には雪崩時での救出方法等の研修に100名近くの参加となり、遭難対策委員会では今年特に遭難事故が多発した巻機山の現地調査を行い、中国青海省への信越山荘完成記念ツアー、カムチャツカ、トルバチェク山への遠征等が特記事項であろうか。

平成8年度の活動として紹介されたのは、平成9年に協会が発足して50周年を迎えることとなりその記念事業の検討、青海省登山協会との兄弟締結5周年記念行事、遭難対策では県内にある登山コースの状況と登山届提出用ポストの設置状況の調査、自然保護では日山協自然保護全国大会を小松原湿原での実施、婦人委員会では青海町マイコミ平を散策する親睦登山等が発表された。

次いで理事会に移り、次の議題が討議された。

1、平成7年度事業並びに同収支決算について
2、規約の一部改について
①第6条に定める副会長3名を4名とする
②規約第19条別表の改正で分担金の値上げ
3、平成8年度事業並びに同予算について
4、平成9年協会創立50周年記念事業について
5、青海省登山協会と兄弟締結5周年記念事業について
6、専門委員会に高体連部門の新設について
7、その他
①青海省登山協会会長他の来県について
②平成8年度評議会
4月14日午後1時〜
新潟市　万代市民会館
③新潟マンサク山の会の加盟について

特に規約の改正で副会長の増員については、協会運営の用務多忙の会長を補佐するためには必要であるとして了承された。

また、分担金の値上げについては日山協の負担金の値上げ、旅費、各専門委員会への補助の見直しを考慮すると各山岳会からの分担金値上げもやむを得ない等の発言と、各専門委員会の予算のあり方とあいまって活発な意見が出たが、各専門委員会の事情もあり、予算の一本化を含め常任理事会で討議することで了承された。

50周年記念事業については20周年県境縦走踏査に対して県山岳を面での踏査、海外登山、記念誌の発行等の意見が出たが、加盟団体、一般会員も参加できる行事の要望が出、総務委員会で検討することとなった。

さらに、今冬の飯豊連峰杁差岳避難小屋での荷上げ品の盗難被害を受けた峡彩山岳会から報告があり、遭難事故にも結びつけかねない事件であり、冬山の事故防止の観点から重点なため各山岳会との連繋の協力依頼があったが、対応に苦慮される事件であった。

これらを討議するには時間が定まらない程で、総務委員会、理事会等で整理した上で4月の評議会で審議されることで了承され散会となった。

冬山技術研修会報告

「低体温症について」

佐渡山岳会　関雅志

県山協、平成7年度冬山技術研修会が3月9日10日上越市青田南葉山中腹で開催され、講義及び実技にわたり実施されました。その中で興味ある事項がありましたので下記報告いたします。

「マッサージが死を招く」ということを知っていますか。

「低体温症」という病名を知っていますか。あまり知られていない病気です。これまで冬山で遭難した登山者が救出されてから後に、死亡することが多々あります。過労・凍死といわれていたその中の幾つかはこの低体温症だったのではないかといわれています。また長時間低温下（雪に埋まる、水に漬かる、風に吹かれる等）の中にさらされ内臓生理機能の衰えた者に対し救出後、このことを知らず凍傷の・手当てとばかり急激に手足のマッサージ等を行って、心臓機能に過度な負担を強い、死に至らしめるケースがあったとされています。数年前に起きた、月山の新大医学部生スキー遭難事故の幾つかの死因ともいわれております。

このような寒冷障害を低温化症といい、冬山だけでなく夏山でも長時間風雨にさらされて体温を奪われたときにも引き起こされる。外見的には何の異常も見られないために単なる疲労からくる気力の低下と思われがちだが、この処置が遅れると軽傷から重傷に陥って死亡する危険があるという。

雪の中に30～40分以上埋まっていたらまず低体温症と思っても良い。

その疑いがある場合には、以下のことはまずやってはいけないこととされています。

①遭難者を動かす（元気そうに見えたので歩かせたら心室細動・不整脈になった）
②マッサージをする
③心臓が止まっていないのに心マッサージをする
④急に手足をあっためる

では何をしたら良いのか、

①事故者を極めて丁寧に扱い、動揺を与えない
②3～4時間以上かけて正常な体温に戻すように、極めてゆっくり加温する
○正常な体温の人が添い寝するのは効果がある
○両脇・そけい部・首・頭に湯たんぽやカイロ等をあてる
③心停止があれば、心マッサージを通常よりもゆっくりと行う。人工呼吸も通常の半分以下のペースで行う
④本格的な救出を待つ間、そっとしておく

これらです。山の中なら、テントに収容し、体の雪・水等を払い、横にさせてからテント内を暖め（40度位まで上げても良い）徐々に体温の回復を待つのが良いとされています。その際お湯を沸かして内部の加温をするのも良いとされています。

冬期間における山岳事故には、この低体温症という危険が潜んでおります、「マッサージが死を招く」と。これまでの常識をくつがえす事例に注目すると共に、これらの事は登山者として必要な知識の一つと感じました。

労山中央登山学校の中山建夫先生には様々指導いただき有り難うございました。

カムチャツカ讃歌 ⑦

女神の微笑の下、全員が登頂

日本山岳会会員　小倉　厚

しかし、この尾根もまた難所だった。雪とは違った意味で困難だった。というのは凍土にはピッケルも歯がたたず、完全に氷結しているから滑る。その上表面の小さな溶岩が、ガラガラ音をたてて崩れ落ちる。「落石！（カミン！）」の声がしきりにとぶ。

ここでヘルメットの必要性を初めて知った。カムチャツカの山では、どこでもこうなんだろう。昨年、北海道の登山家がこのすぐ先のクリチェスカヤで、やはり落石で遭難事故を起こし、ヘリコプターで救助されたという。

その後も、もうひとふんばりの雪渓をようやく登攀（とはん）すると、やっと傾斜が緩くなった。もはや頂上は頭上にある。しかし、この雪渓も思ったより長かった。ジグザグ、ジグザグと天まで続き、限りない頂上への願望がわく。

直下で後続を待っていると室賀隊長が追いこし、やや先で両手を挙げた。標高3682メートルそこが頂上だった。1995年6月29日、午前10時5分、日本人初、感激のトルバチェク山頂。気温氷点下5度、室賀隊長のもつ日の丸の旗がカムチャツカの風にはためいた。

続いて全員が登頂。拍手に握手、万歳！　万歳！だき合って歓喜した。新潟県山岳協会旗を中心に日ロ隊員がビデオ撮影、日ロ国際交流は最高潮に達した。

トルバチェクの火口は、

凄絶を極めて足下にあった。日本の富士山のようなものだが、火口壁はほぼ垂直に3～400メートルほど切れ落ち、底が見えない。1976年（75年説もある）の噴火というからまだ新しい。しかもその時はすさまじい大爆発だったという。頂上付近を吹き飛ばし、数平方キロの森が消滅した。

右手の小ピークに登ると、岩で棒が立てられていた。ロシア人が立てたものだろう。トルバチェクに来て、初めて人気のようなものを感じた。

イルシアさんが、キラキラ光る火口から出た石を拾ってくれた。彼女はこれで4度目の山頂、大切な登頂記念にとポケットにしまい込んだ。

カムチャツカの不測の天候のなかの、ただ一日の快晴、実に幸運だった。あたかも勝利の女神が、我々の頭上に微笑んだとしか思えない。ハバロフスクからの通訳の学生アレクセイ君も元気で頑張った。やはり若さとは強い。

名ごり惜しい山頂、滞留の30分は瞬く間に過ぎ去った。いよいよ下山開始。

まず、往路の頂上に続く緩い長い斜面を、雪煙を上げて快調に走りおりる。速い。登りにあれほど時間のかかった雪渓も、うそのようにあっという間に通り過ぎ、例の難渋した岩稜と急斜面の雪渓の上に立った。

登山とは里に帰るまで完結しない。下山こそ慎重を期さなければならない。

帰路は慎重に、その隣の雪渓にとった。

（長岡新聞より転載）

富士山にそっくりな火山の山

カムチャツカ讃歌 ⑧

帰心矢のごとくBC（ベースキャンプ）へ

日本山岳会会員　小倉　厚

上部はそれでも新雪にのりスムーズにことが運んで、何のこれしきと思われたが、下部の岩稜で手こずった。幾度かの落石、それでもロシア隊員に助けられ、全員なんとか安全圏に辿りついた。近そうでも時間がかかるのは山がそれだけ大きいのだろう。透き通るような大気だ。

そして再びカールのような長い雪渓歩き。新潟県でいう〝シミワタリ〟そのもの。もう皆んな安心、満足、充実感に満ちた顔、顔、顔。

11時～11時30分、雪渓の中央部の岩稜で軽い食事。

カール状地形の入り口の、小ピークの奇岩を目指して再び出発。次第に岩に近づくと時々雪を踏み抜き歩きにくい。気温が上がってきたのだろう。こうなってくるとスパッツが実に有効だ。

12時20分、前進キャンプ着、予定より遥かに早い。再び軽い食事とテントの撤収。重くなったリュックを背負う。

1時50分、テント地出発。いざさらば、トルバチェク！

全員、重い荷物もものかわ、帰心矢のごとく、また帰馬のように小走りに下る。登りの時が嘘のようだ。

「時間もある、せっかくカムチャツカに来たのだから、もっとゆっくり山を楽しもう」の長老の声もとどかない。

最初は往路と違った道をとった。視界は抜群。やがて左手下に登りに通った所が見え、雪渓から湧き出た水が数条の帯となって流れ、カムチャツカ川を作りやがて遠くベーリング海にそそぐ。カムチャツカヒグマの足跡もあった。実に雄大な自然、特別のいろ合い、これこそ本当のカムチャツカなのだと思う。

それでも3～4回ほど休憩。15キロの道のりはやはりこんなに遠かったのかとも思う。

ベースキャンプのある特徴のある姿の山が次第に近づく。まるで月の砂漠。このあたりで月面輸送車の訓練をしたのだろう。

基地に近づくにつれて、再びリシリヒナゲシの花が多くなり出した。久しぶりの快晴に花を精いっぱい広げて風に揺れている。涌水もこんな砂漠の中にあった。それを飲む。甘露、甘露。シベリアと違ってカムチャツカの水は実にうまい。

行きは霧にかくれて見えなかったが、広大な砂漠の果てに、一木一草もつけていない小さな火山、八ケ岳を思わせたり赤城山を思わせたりする。名前はわからないが、どれもこれも日本人未踏峰だろう。遥か彼方には白い雪の峰々が立ち並び神々しい。異国の旅情、ロマンが溢れていた。

午後4時40分、ベースキャンプ着。3時間足らずで15キロを歩き切ったことになる。まだ若いと自信がわいてきた。

（長岡新聞より転載）

指導技術委員研修会たより

根津　芳雄

一般市民対象の市民ハイキングを春秋年2回行っている。個人山行は行われている。平成8年春海外山行の予定。

遠山　実

山荘建設中で出席できません。

草間　雄一

平成6年2月27日の事故の慰霊碑を建てました。場所は鉢山と現場を直線で望める林道脇です。焼山温泉より入ります。

井出　秀雄

当会のはんばぎぬぎと重なりました。申し訳ありませんが欠席させて下さい。

五十嵐篤雄

関東地区。北信越の連絡協議会と日程が重複いたし苦慮しているところです。申し訳ありませんが欠席となります。皆様によろしくお伝え下さい。

小島　堅一

今年新入会員が3人入りました。

加藤レイ子

19日すばらしい晴天の下、爼倉山に登って来ました。飯豊連峰は真白で澄んで青空の中、ひときわ美しく輝いていました。忘れられない風景でした。

高橋　秀樹

2週間位前に足の松尾根を登りタモギ小屋で一泊してきました。新雪が50㎝位でした。その後風邪をひきいまだにセキがとれません。

高木　博朗

山への情熱今も変わらねど、皆壮熟年期をむかえ、山への足は遠のく一方、アゴだけは今も変わらず時折集まっては回想山行で盃を傾けている。

森　庄一

前日25日、福井県芦原にての北信越5県連絡協議会出席後、朝帰りにて参加しますので遅刻する見込みです。

南極だより　2号

（1996・3・7ドーム基地　FAX発）

越冬隊員　片桐一夫

協会会員の皆様、いつも楽しいFAXありがとうございます。

会員の皆様との一体感を味わっております。緊急の用件があればたちまち地球の底から連絡できる文明は素晴らしいものと思います。

3月の声を聞き、我々も定常生活に入りました。調理担当の隊員以外は次のような日課が回転します。当直、皿洗いや便所掃除、燃料補給などの任務に続いて掘削。早番が6時30分～14時30分、遅番が14時30分～22時30分。コア分析10時～18時30分。たまに日曜勤務がありますが、以前より若干余裕ができました。もちろん週休二日制ではありませんし祝日も無しです。

今日午前9時の気温はマイナス51・2℃でした。夜半過ぎにはマイナス60℃程でしょう。

マグカップにお湯を入れて上に放り上げるとブワッという音とともに瞬間に霧になってしまいます。これは新聞報道でご承知と思いますが近いうちにビデオとスチールカメラで記録して持ち帰ります。またここドームF基地は年間を通じて風が弱いため、大気中に残っている僅かな水分が霧となって雪面に付着発達します。これがたまに吹く弱い風で移動するときマリモのようにころころと雪面をころがります。〝南極マリモ〟とでも命名しておきます。

こういう自然現象を観察する余裕も出てきました。この他いろいろな南極自然現象を折にふれて協会の皆様にお知らせしたいと思っております。

2週間程前に正体不明のウイルスにやられて一日寝込みました。誰かが持ち込んだものと思います。今は全快して快調です。ではまた。

〈片桐さんは母校、日越小学校の子供たち36人の質問にFAX4枚にわたり懇切丁寧に回答するなど、なかなか暇のない生活のようです。がしかし、何と言っても楽しみはFAXでしょう。電話、FAXは下記のとおりです。気軽に南極と通信してみましょう。〉

（片桐さんへの連絡）
☎ダイヤル通話　001－873－1206246
FAX（A4版）001－873－81－1206246
取扱時間（日本）　午後8時～午後11時

登山用品専門店
―― 信頼できるパートナー ――
大新スポーツ
新潟市東堀6 ☎(025)222-3736